

2011年度 国際金融論 概要

国際学部 岩村 英之

2011年5月9日

1 講義の概要・目的

国際金融において最も重要な変数のひとつは為替レートです。本講義の前半では、「為替レートとは何か」といった基本的な問いからはじめ、

- 為替レートはなぜ動くのか
- 為替レートの変動は経済にどのような影響を及ぼすのか

といった疑問に対して、経済学の視点からの解説を行います。加えて、これらの疑問を考えながら、国際金融現象を考察するときの枠組（「理論」あるいは「モデル」と呼ばれる）を構築していきます。講義の後半では、前半で構築した分析枠組を用いて、

- 為替レート制度の相違は経済パフォーマンスにどう影響するのか
- 実際に各国はどのような為替レート制度を採用し、どのような経験を積んできたのか（国際通貨制度の歴史）

といった問いを考察します。

加えて、本講義は経済学的な考え方を習得してもらうことも目標とします。したがって、「(マクロ)経済学入門」的な役割を果たすことも意図しています。実際、次項で説明するように、経済学に関する特段の知識は原則として前提しません。

なお、本講義は「知る」講義ではなく、「わかる」「理解する」講義を目指しています。断片的な事実・命題を提示してひたすら暗記力を問うものでもなく、公式を記憶させてひたすら応用問題を解かせるものでもありません。むしろ、その命題や公式がどのようにして導出されたのかを、最初の一步から端折らずに解説していくタイプの講義になります。これは、皆さんが大学卒業後に求められることは、これまで経験しなかったような問題に対処するために新たに公式を生み出すことだからです。誰かが考えた結果ではなく、どう考えたのかを見ておくことが重要なのです。

2 前提科目（ミクロ/マクロ経済学・数学について）

経済学の知識については、特に前提しません。「経済学入門」「ミクロ経済学」「マクロ経済学」といった科目を履修していなくても履修可能とします。そこで教えられている内容も含めて、この講義で必要なことは全て講義の中で説明します。

数学（というより数式操作）については極力用いないようにします。しかし、複雑な論理を言葉だけで展開するのはかえって理解を妨げるため、簡単な数式操作（文字式の計算）やグラフは全体の1/3程度で用いる予定です。ただし、それらも登場する度に初歩レベルから説明します。

国際経済に対するニュース報道レベルの知識についても特に前提しません。そもそも全く興味のない人はこの講義を履修しないでしょうから、ある程度は知っている（興味がある）ものとして進めていきます。

3 講義のウェブページ

私のウェブサイトはこの講義のページを作成しています。課題・試験等に関する情報は全てここにアップしていきます。配布資料がある場合も、必ずここにアップします。また、2008・2009年度に担当者が本務校で行った同名講義の様子（試験問題を含む）を知ることもできます。ただし、本務校での講義は週2コマであり、SFCの倍の時間数である点に留意してください。

<http://www1.meijigakuin.ac.jp/~iwamura/>

4 参考書

- [1] P. クルーグマン, M. オブズフェルド (山本章子・訳), 『クルーグマンの国際経済学 下 金融論』, ピアソン桐原, 2010年。

下記 [2] の後半部分の邦訳です。講義はほぼこの本の内容に従って進めていきます。講義では、本書で提示されている、為替レートを含めた国際経済の動きを記述する枠組である「DD-AAモデル」を、その構築から適用まで説明します。

なお、本書の上巻は、国際貿易論を扱った原著前半部分の翻訳になっています。

- [2] P. Krugman, M. Obstfeld, *International Economics: Theory and Policy, the 8th edition*, Addison Wesley, 2008.

[1] の原著です。間違いなく、世界でもっともよく用いられている国際経済学のテキストです。ほぼ2-3年に1回のペースで改訂されています。5月下旬に第9版が出るようです。なお、[1]は原著第8版の翻訳です。

- [3] 岩田規久男, 『国際金融入門 新版』(岩波新書 1196), 岩波書店, 2009年。

新書なので、経済学自体の初心者にもわかるよう丁寧に(「やさしく」ではない。前提知識のない人にも理解可能なように、「端折らず順を追って」ということ)書かれています。制度・理論・歴史のどれも十分な解説が成されていて、新書としてはたいへん贅沢な内容です。購入をお勧めします。同じ著者の『金融入門 新版』(岩波新書 635)を併せて読むと理解が深まります。

- [4] 高木信二, 『入門 国際金融』(第4版), 東洋経済新報社, 2011年。

- [5] 深尾光洋, 『国際金融論講義』, 日本経済新聞社, 2010年。

- [6] 藤原秀夫, 小川英治, 地主敏樹, 『国際金融』(有斐閣アルマシリーズ), 有斐閣, 2001年。

[4][5][6]は、ミクロ・マクロ経済学(と数学)をある程度勉強した人を対象としたテキストです。私の講義に物足りなさを感じた場合、是非目を通してみてください。

- [7] N. グレゴリー・マンキュー (足立他・訳), 『マンキューマクロ経済学 第2版 I 入門篇』, 『マンキューマクロ経済学 第2版 II 応用篇』, 東洋経済新報社, 2003年。

国際金融論の大部分は、マクロ経済学を外国との貿易・金融取引が存在するケースに拡張したものです。したがって、マクロ経済学の勉強はそのまま国際金融論へとつながります(実際、本講義の半分くらいはマクロ経済学の解説になります)。本書は、そのマクロ経済学の世界標準のテキストです。“経済学部”3,4年生向けですが、

記述が丁寧なのでじっくり取り組めば6-7割は理解できるでしょう。ちなみに、原著 *Macroeconomics* は2009年に第7版が出ています。

この4月に原著最新版の翻訳が出ました（上巻だけですが）。

[9] 飯田泰之、『経済学的思考の技術』，ダイヤモンド社，2003年。

経済学の特徴的な考え方を，経済学を学んだことのない人を対象に解説した本です。

5 成績評価

- 中間試験と期末試験の点数をもとに最終成績をつけます。「中間試験の得点 \times 0.3+期末試験の得点 \times 0.7」として総合点を計算し，受講生の得点分布を加味して最終成績を決めます。
- 中間試験は take-home exam の形をとります。第7週に配布し，第9週の講義終了時まで提出してもらいます。提出が遅れた場合は，原則として中間試験の得点は0点となります。しかし，期末試験を受験する資格を失うわけではなく，期末試験の得点次第では単位取得も可能です。
- 期末試験は第13週に実施します。原則として再試験は行いません。ただし，企業面接の日程がどうしても変更できない場合，“予め”電子メール等で連絡した上で（連絡先は次項参照），それを証明できる書類を数日以内に提出すれば，何らかの代替措置を講じます。
- 出席は一切考慮しません。したがって出席もとりません。その場に物理的に存在しているだけでプラスになることはありません。
- 試験では，前日に丸暗記して当日一気に書き出すような問題は出題しません。暗記力を問うのではなく「考え方（理論）」をどれだけ理解しているか，それを講義で扱ったものとは別の問題にうまく適用できるかを問います。

6 オフィスアワー，連絡先

- 非常勤ですのでオフィスアワーの設定は義務付けられていませんが，講義終了後，2限の時間に数名程度ならばお受けすることができます。声をかけてください。
- Eメールでも質問・相談受け付けます。iwamura@k.meijigakuin.ac.jp